

チャンス・チャレンジ・チェンジ



秋田県立養護学校天王みどり学園 加賀谷 勝

相談・支援活動より



過去に経験したことを、つい最近経験したように嘘をつく子どものケース（小1・女子）

- ・嘘をつく背景としては、自己防衛、自分に注目してほしい、欲求不満、大人への不信感、空想や願望などが考えられる。
- ・嘘の中身にもよるが、嘘をとがめないようにしたい。無理に問い詰めると、さらに嘘をついてしまう悪循環に陥ってしまうので、まずは子どもの話を共感的に聞いたり、軽く指摘したりする。きつく叱るよりも、子どもが嘘をつかなくてもよい環境作りが大切である。
- ・本ケースは、「嘘についてはいけない!」と叱るよりも、「楽しかったね」と共感し、また連れて行くように話すようにアドバイスをした。また、毎日数分でよいので、子どもの話を聞いたり声を掛けたりする「のんびりタイム」を設けることも提案した。



心理検査の結果を本人に伝えた方がよいと提案したケース（小4・女子）

〈結果を伝えたいと判断した理由〉

- 1 みんなとの違いに気付いていたこと
- 2 算数への苦手意識が強いこと
- 3 過去に登校しぶりがあったこと
- 4 検査結果の内容を理解できる力があること
- 5 通級指導教室の利用を勧めたかったこと
- 6 本人と保護者、担任、主治医の関係が良好であったこと



以上の理由により、自己理解を促すためにもよい時期だと考えた。後日、主治医とも連絡を取り合い、担任が伝えることにした。

これまで保護者と学校の同意を得て、検査結果を中学生に伝えたことで、通級指導教室の利用や苦手さをカバーする意欲につながったケースがあった。支援の究極の目標は、本人の自己理解、関係者の子ども理解の促進である。

検査結果の報告時に、保護者からストレートな質問を受けたケース（小5・男子）

- ・1月に検査報告をした際、学校と相談し、子どもの実態を理解してもらうために、両親に来てもらい数値も全て伝えることにした。ある程度、分かっていたとはいえ、保護者の期待と結果に大きな差があった。
- ・それから1か月後。再び相談したいという依頼があった。「障害名は何ですか」「障害は治りますか」「高校進学はできますか」等、矢継ぎ早に質問を受けた。
- ・毎年1回病院を受診していたので、今年は受診目的をはっきり伝え、予約することにした。
- ・進路については、保護者との面談前に、学校と打合せをし、正しい情報を伝えることにしていたので、特別支援学級や特別支援学校の紹介をした。その結果、保護者は早い時期に学校見学や教育相談をしたいと話していた。
- ・保護者のわずかな表情の変化を見抜き、言葉を選びながら相談を進めているが、今回はど真ん中に直球を投げ込んだ。

ある保育園の保護者研修会で伝えたこと
〈小学校入学までに必要な力〉

- 1 自分の名前と年齢が言えますか
 - 2 周りの人に返事とあいさつができますか
 - 3 衣服の着脱ができますか
 - 4 トイレの型が違ってても用がたせますか
 - 5 食事は20分くらいで食べられますか
(時間を意識して行動できる)
 - 6 遊んだ後に片付けができますか
 - 7 体を動かして楽しく遊べますか
 - 8 人の話を聞いて行動ができますか
 - 9 自分の思ったことを伝えられますか
 - 10 隣の子とも仲よく遊べますか
- ・ポイントは、「生活習慣の定着・自己決定力・体力・思いやり」、そして、「根拠のない自信」である。



〈愛情を伝えるシンプルな方法〉

- 1 触る（愛情がわいてくる）
- 2 見る（子どもはいつも見てほしいもの）
- 3 声を掛ける（ほめる回数が増える）
- 4 話を聴く（良好な信頼関係が築ける）